

【研究ノート】

京都大学文学部社会学研究室 「村落調査データベース」の利用について

筒井 琢磨

A research note on the Rural Community Research
Database of Kyoto University

Takuma TSUTSUI

Abstract : I examined possibilities of use of the Rural Community Research Database edited by the Department of Sociology of Kyoto University. We can use this database in two ways. One is the use for social research education. There are few contents about community survey in recent Japan. We can use this database as texts of community survey. Another is the use for a follow-up survey. There is the same place between this database and fields of the COC project of Kogakkan University. We can know what happend in rural communities in Japan for about 60-70 years through the follow-up survey.

はじめに

京都大学文学部社会学研究室が昭和22年(1947)から昭和46年(1971)にかけて、全国158地域で村落調査を実施し、449冊の報告書が研究室で保管されている。京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」教育プログラム(2008年度~2012年度)が採択された際、これらの村落調査報告書を親密圏と公共圏をつなぐ領域として重要なコミュニティに関する教育・研究の資料として公開を進めることになり、「村落調査データベース」として整備されることになった。現在は調査実施地リストと報告書リストが同研究室

ホームページ上でデータベース概要とともに公開されている¹⁾。

報告書そのものは元々、研究目的で希望者に閲覧のみが許可されてきた。449冊はすべて手書きの報告書であったが、データベース化によって文字部分は電子テキスト化され、写真や図表はPDF化されている。電子テキストファイルとPDFファイルは従来通り、研究目的での閲覧のみが許可されている。データベース化された情報がまだ公開されていない事情については後述する。本稿ではホームページ上で公開されている情報と、すでに公開されている刊物のみを扱うことにする。

この村落調査報告書の利用方法として、同研究室は再調査の基礎資料としての利用を挙げている²⁾。偶然であるが、本学（皇學館大学）が「地（知）の拠点整備事業」として取り組む「『伊勢志摩定住自立圏共生学』教育プログラムによる地域人材育成」（平成26年度～平成30年度）における課外活動取組 CLL 活動のうち1活動が、1961年村落調査の実施地である。本地で再調査を行うとすれば約60年のスパンを経た調査となる。本稿では同地での再調査実施も念頭に置いて、この報告書の利用方法について検討してみたい。

1 村落調査の概要

同研究室ホームページによると、この村落調査の概要は次の通りである。

村落調査は京都帝国大学時代に哲学科社会学講座に着任した白井二尚が主導し、1943年に始まるが、本格的な実施は1947年からである。学部の調査実習として実施されたものが主であるが、大学院生や研究者による調査も含まれる。1968年調査後に学生運動の影響もあって中断し、1970年に再開して1979年まで実施されるが、再開後は授業ではなく、研究会として実施されたという。また、1974年、1978年、1979年は再調査である。

2 『村落調査細目』について

白井は自ら作成した「村落調査細目」を学生に書き写させ、それを基にして調査項目を決め、調査に当たらせていた。1969年に同じ題名で書籍として刊行される³⁾が、この書籍は20数年間にわたって各地で調査されてきた結果を踏ま

え、増補改訂を経て至った完成形と捉えることができる。なお、1972年の再版刊行の際にも改訂作業が入っている⁴⁾。

「はしがき」には次のように書かれている：

本書は村落を社会集団という観点から分析把握することを目的とする実態調査の手引きとして編まれたものである。これまでの村落に関する調査の多くは、民俗・経済などの観点よりするもの、または郷土誌的な百般の事項の羅列を目指すものに止まっていた。最近日本においても村落の社会的調査研究が増加してきたが、これらも主として村落における家族・同族・階層・組合などの特殊項目についてのものか、または村落生活の全領域にわたる百科全書の傾向のものであった。社会集団としての村落の生活も宗教・道徳・政治・経済・風俗・慣習など人間生活の各領域から成り立っていることは勿論であるが、本書はこれらの諸領域における人間の行動や関係が、集団の主要側面にいかに現われているかを総合的に調査せんことを期するものである⁵⁾。

ここでは、社会学的調査研究であることが強調され、かつ社会集団としての村落研究を志向した実態調査であることが鮮明に打ち出されている。約30年間という長期間にわたる調査研究を貫く方針を確認することができる。しかし、社会集団理論に基づく項目を立てているわけではなく、どこまで理論的分析のことが意識されていたかは各報告書を丹念に分析していく必要がある。

項目の設定については次のように書かれている：

あらゆる領域において近代化の遅れている極めて古い形態の村落と、万時に近代化の進んだ極めて新しい形態の村落との二つの型について、それぞれの領域の主要点の新旧両様の特質を具体的に明らかにし、これら二つの型を手引ないし索出原理 (heuristisches Prinzip) として、調査村落の諸点がいかなる程度に古いかまたは新しいかの実態を明らかにするという手続きをとることが、最も適切有効であろう⁶⁾。

実際には以下の(1)～(9)の9つの対立項を特質項目として設定している。項目ごとの説明を抜書きしておく。

(1) 封鎖性・開放性

「封鎖性というのは、社会の境界を越えて人やものの出入することがなく、従ってこの出入を媒介としてその社会が外界と接触交渉することがないという事態を意味し、開放性はこれの逆である」⁷⁾とする。

(2) 狭小性・広大性

村落は面積も人口も拡張するのに限界がある一方、都市は限りなく膨張することが好対照であることを指摘する⁸⁾。

(3) 生活の共同・分離

「最も狭小な地域社会としての村落が高度の封鎖性を保持する限り、村人は必然的にいずれも障がいの大部分を村内で送るが故に、彼らの接触交渉の相手は殆ど常に自村の成員に限られ、従って村人同志があらゆる生活の領域において行動をともにする機会は正月から大晦日までにわたって頗る多いことが、古い型の村落の特質の一つ」⁹⁾であるとする。

(4) 等質性・異質性

「村人相互の接触交渉ないし共同生活が右に述べた如く不断に重ねられ、しかもそれが村落の封鎖性のゆえに終生続くならば、この接触交渉によって村人は各人の生活について知悉し、思惟・感情・意欲・行動を総括した意味での行為の様式が相互に模倣され伝播して、生活の仕方がおのずから有無相通ぜられることによって、古い型の村落には高度の等質性が見られるのは自然のことである」¹⁰⁾とする。

(5) 伝統性・変動性

「村落の封鎖性は村内の伝統を支持強化し、旧慣伝統の支配は古い型の村落生活の特質の一つとなる」¹¹⁾とする。

(6) 即自性・対自性

伝統性の支配する封鎖的な村落ではその村伝来の行為様式を身につけており、その意義や活を反省批判吟味検討しようとせず、遵守することが当然自明とするのが常であるとする。このような没合理的盲目的な生活態度の特質を

ヘーゲルや実存哲学者の用語にならって即自性 (An-sich-sein) と呼び、古い村落における村人の行為ないし生活の特質とする。他方、村落が開放されて外界の別の様式に接するようになった時、「これらの様式を比較し、それぞれの長短・是非・優劣を分析・考量するにいたり、目的にかなうもの・価値の大なるもの・理由の任用されるものを採ろうとする合理的な態度に転ずるは自然のこと」¹²⁾であり、このような合理的態度の特質を対自性 (Für-sich-sein) とする。

(7) 具体的個別性・抽象的普遍性

「村人が村内の人や物を具体的個別的直観的に把握していることも、古い村落の注目に値する特色の一つ」¹³⁾であるとする。

(8) 主情性・非情性

「古い型の村落では村人同志の相互作用は情緒豊かなものであることを特色とする。即ちこの種の村落においては、村人の行為がマックス・ウェーバーのいわゆる主情的行為 (affektuelles Handeln) となることを特質とする」¹⁴⁾と述べる。

(9) 調和性・不調和性

「この種の (引用者注：伝統的な古い型の) 村落では人々は親和信頼を以て結ばれ、不破対立や分離抗争は乏しいはずである。故に古い型の村落は調和ある社会生活を本来の特質の一つするのである」¹⁵⁾。

データベースではこの9特性を分類項目として使用している。449冊の報告書のうち、(1) 封鎖性・開放性と分類されているのは63冊、(2) 狭小性・広大性は0冊、(3) 生活の共同・分離は67冊、(4) 等質性・異質性は62冊、(5) 伝統性・変動性は62冊、(6) 即自性・対自性は49冊、(7) 具体的個別性・抽象的普遍性は44冊、(8) 主情性・非情性は42冊、(9) 調和性・不調和性は41冊である。ただし、複数の項目に分類されている報告書が多い。また、「家族」や「通婚」、「年中行事」などの項目名も存在する。

『細目』のはほぼ趣旨通り、村落を前近代型と近代型に区分する9特性に基づいて調査が実施されていることがわかる。なお、白井はこれらの村落調査に基づいた研究として公表しているものは(1) 封鎖性・開放性を中心としたもの¹⁶⁾であり、9特性が羅列的に並べられているわけではなく、この(1)～(9)の順序

が大きな意味を持つことを伺わせる。

『細目』では9特性ごとに章が置かれ、特性に該当する中項目を設定し、さらにその下に実際の調査項目が記述されている。本稿では中項目のみ紹介する。

(1) 封鎖性・開放性には、21の中項目が設定されている。①地勢と交通、②気象、③生業、④共有地と共同施設、⑤来住者と外来者、⑥自足性、⑦政治的封鎖、⑧外部との関係、⑨家の古さと分家の数、⑩外部に対する特殊性、⑪売買、⑫通信とマス・コミュニケーション、⑬通勤・通学、⑭出稼ぎ、⑮転出・転入、⑯婚姻、⑰交際、⑱娯楽と教養、⑲医療、⑳労働、㉑旅行、㉒宗教、である。

(2) 狭小性・広大性には、中項目はない。人口と面積が調査項目である。

(3) 生活の共同・分離には、11の中項目が設定されている。①集会、②村仕事、③共有財と共同施設、④特殊共同労働、⑤林業労働、⑥漁業労働、⑦人の一生、⑧年中行事、⑨団体、⑩娯楽、⑪雑、である。

(4) 等質性・異質性には、11の中項目が設定されている。①職業、②土地所有関係、③漁村における地位と分配、④家計と農耕、⑤衣食住、⑥教育、⑦昔の身分層、⑧上下の別の表現、⑨上下の別の規定、⑩擬制的親子関係、⑪年中行事、⑫人の一生、⑬宗教・祭事、⑭雑、である。

(5) 伝統性・変動性には、10の中項目が設定されている。①家族、②衣食住、③道具、④農耕、⑤山仕事、⑥漁業、⑦祭礼、⑧人の一生、⑨年中行事、⑩雑、である。

(6) 即自性・対自性には、16の中項目が設定されている。①神事と仏事、②禁忌、③占い、④人の一生、⑤年中行事、⑥農耕、⑦山仕事、⑧狩猟、⑨漁撈、⑩経済、⑪伝説と妖怪、⑫天文と気象、⑬俗信、⑭道徳と教養、⑮郷土自慢、⑯生活改善、である。

(7) 具体的個別性・抽象的普遍性には、7の中項目が設定されている。①自然についての知識、②人や家についての知識、③交際、④一般的対象物についての知識、⑤雑、である。

(8) 主情生・非情性には、9の中項目が設定されている。①家族愛、②交際、③年中行事、④人の一生、⑤旅行、⑥外来者の扱い、⑦動植物への愛情、⑧道

具への愛情，⑨雑，である。

(9) 調和性・不調和性には，7の中項目が設定されている。①家族の趙あ，②生活の扶助，③近隣親族の関与と責任，④統制，⑤審議，⑥漁場の調和，⑦雑，である。

中項目に重複があることについて，臼井は例として祭礼を挙げている。祭礼は(1)封鎖性・開放性，(2)狭小性・広大性，(3)生活の共同・分離，(4)等質性・異質性，(5)伝統性・変動性，(6)即自性・対自性のそれぞれで考察されるべき事項であり，同様に，本来はすべての事項が9特性それぞれで考察されるべきと述べている¹⁷⁾。

3 データベースの利用について

このデータベースを利用する意義は2つある。

1つは社会調査教育の教材としてである。標本調査や事例調査は調査手法としてよく使われていて，テキスト類や研究成果も利用しやすい状況にある。集落全体を対象とした調査は社会調査史を学ぶ上であまりなじみのないものである。研究倫理や個人情報の考え方が時代的にかなり異なることは確かだが，地域社会を対象とした社会調査教育研究を行う際，このデータベースから学ぶことは多いと思われる。

もう1つは再調査である。この村落調査データは時間的スパンが長いことや調査地が全国に広がっているので，比較のための二次分析に使える可能性がある。この村落調査自体が当時，急激に変容しつつある村落を目の当たりにして危機意識をもって取り組まれたものであり，再調査によってすっかり変容してしまった現在と比較することは，村落にとって近代化とは何だったのかという共有される問題意識にとって意義があることと思われる。

再調査を前提としてこのデータベースを利用する際，気をつけなければならないのは個人情報である。現在の社会調査では考えられないことであるが，『細目』では家族・親族関係，婚姻や通婚圏を確認するために明治5年の壬申戸籍や調査時点での戸籍を照会したり，家計を確認するために租税徴収簿で固定資産や所得を調べたりするような記載がある。報告書ではおそらく個人を特

定できる形ではデータは出ていないと思われるが、調査対象となった集落は60～120戸と小規模であり、データの取り扱いは慎重にならざるを得ない。このデータベースが完全公開でない事情はおそらく個人情報への配慮であろう。

注

- 1) 京都大学大学院文学研究科社会学研究室「村落調査データベース」
<http://www.socio.kyoto-u.ac.jp/archive/sonraku-2/>
- 2) 「同上 URL」
- 3) 白井二尚『村落調査細目』関西大学経済政治研究所，1969年。
- 4) 本稿は再版本を用い、『細目』と略す。
- 5) 『同上』はしがき。
- 6) 『同上』2頁。
- 7) 『同上』3-4頁。
- 8) 『同上』10頁。
- 9) 『同上』11頁。
- 10) 『同上』14-5頁。
- 11) 『同上』18頁。
- 12) 『同上』24頁。
- 13) 『同上』29頁。
- 14) 『同上』32頁。
- 15) 『同上』35頁。
- 16) 白井二尚「日本村落の封鎖性と開放性」『京都大学文学部研究紀要』京都大学文学部，第5号，1959年，1-182頁。
- 17) 白井『前掲書』44-45頁。